

最愛の人

田  
淵  
靖  
章

菅沼政光 人物  
菅沼あかね  
緒方純  
小林正敏

(60) マスター  
(28) 政光の友人  
(24) 政光の妹  
(28) アルバイト

○線路沿いの通り(夜)

線路を電車が駆け抜けて行く。

その横の道路の先に、メキシコ料理店が窓から光を漏らしている。

○メキシコ料理屋・店内(夜)

菅沼政光(28)、緒方純(28)、カウンター席に横に並んで座っている。

緒方「で、今の仕事は順調？」

政光「なんとか続いている……」

と、悲しげな表情で視線を落とす。

政光「こんな仕事しかできないから……」

と、ため息を吐く。

緒方「そうだ、今週の日曜日にさ、久々に釣りでも行かない？」

政光「悪いんだけど、休日は予定があるんだ」

と、笑みを浮かべる。

緒方「おっ、なんか楽しい事でもあるんだな」  
政光「こんな俺だけど、好きな人がいるんだ」

テーブルの端っこに座っている小林正

敏 (60)、身を乗り出すように政光の方へ  
耳を近づける。

政光「その人が居るから、今の仕事を続けられてるって部分があるかな」

緒方、無表情に政光を見ている。

政光「彼女はー、自分の意見を持っていてー」

と、ニヤニヤして視線を落とす。

政光「厳しい事も言ってくるけど、意見をしっかりと聞いてくれる女性かな」

緒方、政光から目を逸らし、正面を向いて険しい表情を浮かべて黙り込む。

緒方「俺は前も言ったけど、政には政より賢くて、支えてくれる女性が必要だって」

政光「あ、うん」

緒方「でも今の話を聞いた限りだと……」

小林「いや！政にはそういう女ができたんだよ！」

と、険しい表情で緒方を見て、合図をするように顔を横に振る。

緒方、困った表情で政光を見る。

政光、上を向いてニヤニヤしている。

○菅沼家の外(夜)

雨が降っている。

政光、扉の元に歩いて来ると、鍵を開けて家の中に入る。

○菅沼家・一階廊下(夜)

政光、靴を脱いで廊下に行くと、階段を上っていく。

○菅沼家・二階の部屋(夜)

電気の消えた薄暗い室内。

階段を上って来て、扉を開け中に入ってくる音がする。

扉の閉まる音がする。

政光の声「きついなー……」

と、ため息を吐く。

数秒が経過すると、雷の光りが窓から入り、部屋の中央に立っている政光の

姿を一瞬だけ照らす。

政光の声「政光さん、帰ってたのね」

外から雷の音が響き渡る。

政光の声「どうしたの、浮かれない顔して？」

政光、窓の前に向かう。

窓に政光の姿が影のように現れる。

政光「こんな人生もうやめたいよ。でも他にできる事もないし……。そんな事ないわ。

政光さんなら何でもできる」

窓から雷の光が入ってくる。

目を瞑ってニヤけた政光が一瞬照ら  
しだされる。

すぐに暗闇に包まれる。

### ○菅沼家の外(夜)

雷の音が響き渡ると、激しい雨が降り  
出す。

強い風が吹き荒れ、周囲の草木が揺れ  
ている。

政光、二階の窓を開ける。

両手を窓枠の上に置いて、身を乗り出すように顔を出す。

その顔と上半身が降り注ぐ雨にうちつけられ濡れていく。

政光「俺に他の事なんてできっこないよ」

目を瞑って上を向いてニヤけた表情を浮かべる。

政光「そんな事ない。政光さんはやればできる人よ。私は誰よりもそれを知ってる」

と、地面の方を向いて目を開ける。

政光「俺に……できる……か……」

と、黙り込む。

傘をさしている老人、呆然と窓から外を見ている政光を見上げている。

○菅沼家・一階廊下(夜)

菅沼あかね(24)、ふすまを開けて出て来ると、階段を上って行く。

○菅沼家・二階の部屋(夜)

あかね、静かに扉を開けて入って来る。  
政光、あかねに背を向けて、窓の外を  
向いて立っている。

政光「私が政光さんに嘘をついた事がある？」

あかね、照明のボタンを押す。

薄暗く切れかかって点滅する照明に  
部屋が照らし出される。

政光、瞑っている目を開けると、驚く  
ように振り返る。

あかね、悲しそうな表情で入口の前に  
立っている。

政光「なっ、何だよ？」

あかね「お兄ちゃん、どんどん酷くなってる」

政光、顔を逸らす。

あかね「一度、病院に行こうよ」

政光「ほっといてくれ！」

と、背を向けて窓の方を向く。

あかね「ほっとけないよ。ずっと一人で話し  
続けるなんて変だよ」

政光、目を瞑ったまま眉間にシワを寄



せて、勢いよく振り返る。

政光「あなたに政光さんの何が解るのよ！」

あかね、怯えるように一步下がる。

あかね「どっ、どういう事……」

政光「政光さんは苦しんでるのよ！あなた達が何もしなかったからこうなつたんじゃない！」

と、一步踏み出す。

政光、目を開けて横を向く。

政光「いや、いいよ幸子さん。彼女は俺の事を思ってくれてるんだ」

と、目を瞑って眉間にシワを寄せ、反対を向く。

政光「黙ってられないわよ！あなたの事を何も解ってないじゃない！」

### ○菅沼家の外（夜）

傘をさして窓の方を見上げている老人。

老人「幸子だ……。恐ろしい……」

と、怯える様に顔を横に振る。

○菅沼家・二階の部屋(夜)

目を瞑って眉間にシワを寄せた政光、あかねの元に歩いて行き、正面に立つ。

政光「今、彼は変わろうとしてる」

あかね「変わる？」

政光、目を開け横を向く。

政光「俺には今の生き方しかできないよ。変らないし、変わりたくない。だから、このまま幸子さんと結婚するんだ」

あかね「結婚って……」

政光、目を瞑ると、一瞬だけ歯をかみしめ怒った表情になる。

あかね、その表情を見て怯える様に眉を顰めて一歩下がる。

政光「私も同じ事を考えてた。でも政光さん、あなたは何でもできる人よ。だけどその為には……私が消えないといけない」

政光、目を開けて窓の方へと振り返る。

政光「幸子さん何を言ってるの!？」

政光、目を瞑ってあかねの方を向く。

政光「あかねさん、もう少しだけ待って。私  
が必ず彼を変えて見せるから」

あかね「でっ、でも……」

政光「あと少しなの。あと少しで彼はあるべ  
き姿を取り戻せる。私には解るの」

あかね、一度視線を逸らし、少し黙っ  
てから、政光を見る。

あかね「じゃあ……あの……幸子さんでした  
っけ？」

政光「ええ。そうよ」

あかね「さっ、幸子さんは……いいの？」

目を瞑った政光、笑みを浮かべて、ゆ  
っくりと頷く。

### ○菅沼家・2階の階段(夜)

あかね、扉から出て来ると、すぐに  
扉を閉める。

振り返って扉の方を向き、考えるよう  
に少し黙ってから階段を下りて行く。  
扉の鍵の閉まる音がする。

○菅沼家・外観(夜)

大雨に打たれている。

政光、二階の窓とカーテンを閉める。

雷が光る。

○菅沼家・二階の部屋(夜)

暗闇に包まれている。

雷の音が響く。

政光の声「幸子さん、嘘だと言ってよ……」。

幸子さんがいなくなったら、俺はもうダメだ。だから嘘だと言ってよ……。嘘よ。え?! こうでも言わないと、政光さんが精神病院に連れて行かれるでしょ。そしたら私だけが消されてしまう。じゃあ幸子さん、僕達はこれからも? そうよ。だから行くわよ。どこに? この世界から逃げるのよ!」

雷が光り、目を瞑り怒っている表情の政光を一瞬だけ照らし出す。

政光の声「政光さん、早く準備して! うん!」

雷の落ちた大きな音が響き渡る。

田  
渕  
靖  
章